

学位授与番号：乙 3 1 6 0 号

氏 名：稲村 圭亮

学位の種類：博士（医学）

学位授与日付：平成 28 年 9 月 14 日

学位論文名：

Correlation between cognition and symptomatic severity in patients with late-life somatoform disorders.

学位論文名（翻訳）：

（老年期身体表現性障害患者における認知機能と重症度の相関について）

学位審査委員長：教授 井口保之教授

学位審査委員：教授 柳澤裕之教授 教授 宮田久嗣教授

論文要旨

論文提出者名

稲村 圭亮

指導教授名 中山 和彦 教授

主論文

Correlation between cognition and symptomatic severity in patients with late-life somatoform disorders.

(老年期身体表現性障害患者における認知機能と重症度の相関について)

Keisuke Inamura, Norifumi Tsuno, Shunichro Shinagawa, Tomoyuki Nagata, Kenji Tagai, Kazuhiko Nakayama.

Aging and Mental Health 2015; 19(2):169-174.

老年期患者の日常診療において、身体愁訴はよく見かけられる症状である。老年期における身体表現性障害は、疾病の罹患、ライフイベント、認知機能の低下など加齢に伴う様々な因子が誘因となると考えられる。しかしながら、現在の診断基準では、その症状形成におけるプロセスが明確となっていない。本研究では、関連する因子のなかでも特に認知機能に焦点を当て、老年期の身体表現性障害における特徴を捉えるとともに、症状との相関を調べることを目的とした。60歳以上の患者で、DSM-IV-TRの診断基準にて鑑別不能型身体表現性障害の診断基準を満たしている患者を対象とし、身体表現性障害の重症度をハミルトン不安評価尺度（HAMA）にて測定し、認知機能の評価は mini-mental state examination(MMSE)、frontal assessment battery(FAB)、日本語版 neurobehavioural cognitive examination (J-COGNISTAT) を用いた。そして、老年期身体表現性障害患者における認知機能プロファイルを評価するとともに、重症度の認知機能の相関を調べた。

その結果、老年期身体表現性障害患者では、J-COGNISTAT において注意機能の低下が認められた。また、身体表現性障害の重症度である HAMA は FAB の総得点、および FAB の下位項目における類似・運動系列において相関が認められた。また、HAMA は J-COGNISTAT における計算の項目とも有意に相関を示した。

これらの結果は、老年期における身体表現性障害が認知機能低下と関連し、また重症度が遂行機能と関連しており、これが症状の形成過程の関与していることが示唆している。老年期身体表現性障害の治療にあたるうえで、背景にこのような関連する因子が存在することを考慮しなければならないと考えられる。

学位審査の結果の要旨

稲村 圭亮氏は平成 17 年 3 月本学を卒業、平成 19 年 4 月より精神医学講座に所属、その後臨床検査医学講座に移籍し臨床、研究、教育に研鑽を積んでいる。稲村氏の学位申請論文は主論文 1 編、副論文 1 編からなり、原題は「Correlation between cognition and symptomatic severity in patients with late-life somatoform disorders.」である。研究は精神医学講座 中山 和彦教授の指導により実施、成果は平成 27 年 Aging Ment Health. 誌 (Impact Factor, 1.751) へ公表された。学位申請論文の内容は別添資料を参照されたい。以下、審査委員会における審査結果を報告する。

平成 28 年 8 月 18 日、審査委員長 井口 保之および柳澤 裕之、宮田 久嗣 両審査委員の出席のもとに公開学位審査会を実施した。稲村氏の研究概要発表に引き続き口頭試験を実施した。口頭試験においては以下の質問があった。

- 1) フレイルと身体表現性障害の差異およびオーバーラップ
- 2) 認知症の発症進行と身体表現性障害の関連
- 3) J COGNISTAT スコアのカットオフ値の設定
- 4) 身体表現性障害の一次予防
- 5) 性差が結果に及ぼす影響
- 6) HAMA-SOMA スコアと J COGNISTAT の関連
- 7) 身体表現性障害をより正確に評価可能なスコア法
- 8) ワーキングメモリーの定義
- 9) 身体表現性障害の「主訴」と各スコアの関連
- 10) 頭部 MRI を含む神経画像検査
- 11) 主論文と副論文の対象について

など多数の質疑応答を行った。

これらの質問に対して、稲村氏は適切に回答するとともに、関連する知見について幅広く意見を述べ、学位申請論文の内容に関する有益な議論を展開した。その後、審査委員会において慎重に審議した結果、稲村氏の研究は、不定愁訴として看過される傾向のある「身体表現性障害」は、前頭側頭型認知症を含めた認知症の早期症状の可能性があるという新たな知見を示した。審査委員は審査において指摘があったテーシスの訂正を確認した上、本研究内容を学位論文として価値があるものと認定する次第である。